

# 災害史関連資料の意義に関する検討と「富田川災害 記」 翻刻と解題

## Examination of the significance of materials related to disaster history and transcription and Explanatory Notes of “Tondagawa Disaster record”

橋本唯子

HASHIMOTO Yuiko

和歌山大学クロスカル教育機構教養・協働教育部門

### Abstract

The significance of materials related to disaster history, which has been neglected in Japan history, will be examined. The “Tondagawa Disaster record” is an important historical record of the damage caused by the Great Meiji Flood. This material is significant in that it shows the situation immediately after the disaster and also expresses concretely the situation of river channel blockage. This paper described a transcription and explanatory notes of it to convey these which should be passed down through the generations in the future.

**キーワード／Keywords:** 災害史、石碑、翻刻、解題、富田川災害記／disaster records, stone monuments, reprinting, translation and explanation of stone monuments, “Tondagawa Disaster record”

### 1. はじめに

#### 1-1. 日本の災害史

日本は歴史上さまざまな自然災害に遭遇している。日本史学において災害史は従来それほど重視されず、関連資料も多く扱われてきたとはいいがたいが、近年は全国的に少しずつ進展がみられる。ここではまず、主に『日本災害史』（北原、2006）を基に日本の災害史を整理し、次いで和歌山の災害史について概観する。

古代・中世においては、浅間山噴火や1177年の大火などが資料に記述されている。

近世に入ると、さらに豊富に残された資料から「地震、噴火、津波などの自然災害はある一定の時期を集中的に発生するという特徴がある」ことがわかるようになる<sup>1</sup>。またその事例として元禄地震（1703）・宝永地震（1707）・富士山宝永噴火（1707）、約150年後の安政東海地震・安政南海地震（1854）・安政江戸地震（1855）が示されている。なおこのうち安政南海地震は、濱口梧陵をモデルとした「稲むらの火」の逸話で広く知られている。ここから約90年後の昭和東南海地震（1944）・昭和南海地震（1946）を含め、ことに地震災害における連動性および連続性について指摘することができる。

自然災害は地震のみならず、噴火や台風も時として大きな被害をもたらす。磐梯山噴火（1888）、室戸台風（1934）などが大規模災害として挙げられる。

時代が新しくなると、これら多種にわたる自然災害から人々を救済し、インフラを復旧させ、治水工事や堤防築造など自然災害を未然に防ぐためのさまざまな策が講じられていく。またこれらに関連する法律も徐々に整備されていった。これらの対策は、過去の甚大な自然災害からの学びを礎として進められたといえよう。

## 1-2 和歌山の災害史

和歌山は、『和歌山県災害史』をして「わが国は災害国である」、かつ「災害国日本の縮図はまた和歌山県である」と言わしめる状況である<sup>2</sup>。『和歌山県災害史』はその特徴として風水害による被害が多いことを挙げ、1948年から1956年までの、和歌山県の被害額は全国額の約5%と「災害県と云う好ましくない名称が付くわけである」としている<sup>3</sup>。

和歌山における災害の歴史を振り返ると、慶長地震（1605）・宝永地震（1707）のほか、後述する明治大水害（1889）・紀州大水害（1953）などがある。このうち詳細が判明する災害において記述すると、宝永地震における家屋被害が約29,000戸、紀州大水害における家屋被害は50,000戸近くに及ぶなどとされ、大規模災害が多いことがわかる。

このように多くの自然災害による被害を受けてきた地域では、先人が色々な方法を用いてその災禍を伝え、残してきている。前述した「稲むらの火」もその一例といえよう。本稿では、和歌山に残る災害に関する資料のうち重要なものの一つ、「富田川災害記」について記述し、その意義を示すことを目的とする。

## 2. 和歌山に残る「災害の記憶」

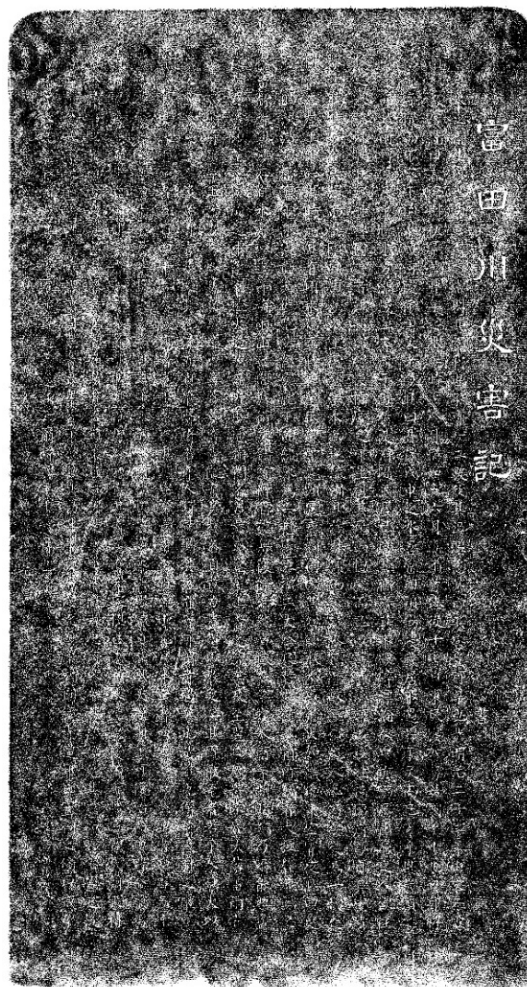
2011年9月に発生した紀伊半島大水害から10年以上の時が経過したが、以後も多くの自然災害が日本各地で被害をもたらしている。和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会（以下「実行委員会」と略す）では、過去の災害に関する記憶を呼び起こし、伝えるために、県内各地に残る「災害の記憶」を発掘する事業を行っている。

この実行委員会は、『令和3年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業』に基づき立ち上げられ、「地域に眠る『災害の記憶』と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」を実施してきた（以下「『災害の記憶』事業」と略す）。実行委員会は、和歌山県立博物館、歴史資料保全ネット・わかやま、和歌山県立和歌山工業高等学校で構成されている<sup>4</sup>。

筆者は当事業にかかわり、田辺市（旧田辺市域及び旧大塔村域）・上富田町を対象に、災害の記憶の発掘と、文化遺産の所在確認・調査などを行った。本稿ではこの成果を紹介する。なお当事業では既に『先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅦー命と文化遺産とを守るためにー【田辺市・上富田町】』（和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会、2022）および和歌山県立博物館編『歴史から学ぶ防災 命と文化遺産とを守る 現地学習会 発表資料集』（和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会、2022）が刊行されており、筆者も執筆に関わっているが、この2冊は地域住民に向け、簡潔かつ明瞭な解説を行うことを主としていて、資料の翻刻が記載されていないため、筆者が円鏡寺および上富田町教育委員会の協力を得て、翻刻を掲載し、解題を執筆する。また、当該資料は『上富田町史』に記載があるが、一部変更点がある。また『上富田町史』が現在では入手困難でもあるため、改めて翻刻を発表することに意義がある。

### 3. 執筆の経緯

1889年8月、明治大水害と呼称される水害が発生した。この災害は、奈良県十津川村に未曾有の被害をもたらし、村民600戸・2691人が北海道に集団移住し、新十津川村を発足させたことで知られている<sup>5</sup>。和歌山県下ではことに富田川流域において大きな災禍となった。『和歌山県災害史』によると、明治大水害において和歌山県下の死者数は1221名である。「富田川災害記」碑に記された、「圧死者二十三人。溺死者五百四十二人」をあわせた565名は、和歌山県下の死者数全体の約46%と高い比率であることがわかる。また、上富田町史編さん委員会編『上富田町史』第1巻通史編（上富田町、1998）によると、「水源地帯の山の崩壊が数多く、なかには五〇〇間（約九〇〇メートル）にわたる所もあったといわれ、この上流での山崩れが川をせき止め、下流域ではいったん水が引いたとみられたが、その堰が切れて一度に大水が下流へ押し寄せ、堅固とされていた彦五郎堤を初め、堤防という堤防を壊し、家々や田畑などを一挙に押し流すことになった。」という被害状況であった。なお、現在でも毎年8月19日に彦五郎堤防において慰霊祭が営まれている。これを契機として記された「富田川災害記」碑が円鏡寺（上富田町朝来）境内に残されている。後述するように、記述は漢文で、碑の摩耗が激しく、そのままでは判読困難である。『『災害の記憶』事業』が、過去の災害を知り、人々に伝えることを目的としていることを鑑み



左 石碑現状（撮影：2021年11月）

右 「富田川災害記」碑拓本（画像提供：「地域に眠る『災害の記憶』と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」）

ると、このように確認しがたい内容を判読し、記録することは重要である。このため、事業実行委員会での協議の結果、石碑から拓本を採取し、「富田川災害記」碑を紹介することとした。

前述したように、『「災害の記憶」事業』では、『「災害の記憶」を未来に伝えるⅦー命と文化遺産とを守るためにー【田辺市・上富田町】』を刊行し、あわせて現地学習会を開催した（2022年2月26日（土） 上富田文化会館小ホール・同27日（日）田辺市立中部公民館大集会室）。この学習会はコロナ禍の影響によりオンライン開催となったが<sup>6</sup>、研究成果を還元する方法として、町域において小冊子を全戸配布し、講演を行ったため、比較的広く周知することができた。なお、当報告は動画アーカイブで視聴可能である。

#### 4. 「富田川災害記」碑の資料的価値

「富田川災害記」碑は、明治大水害の被害を伝える石碑である。撰文は小幡儼太郎、書は成瀬温である（後述）。この災害については、『和歌山県災害史』において県下の



被害状況が、また『上富田町史』によって富田川の様態が示されているが、建碑が明治大水害と同年の11月であり、ほぼ当時を正確に伝えるものとして貴重である。特に土砂ダム<sup>7</sup>の現象について、学術用語が定着していなかった時代にそのようすを記述したものであり、資料的価値が高い。

(1) 河山嶽往往壞崩及自其中噴水上騰狀如倒大瀑。而其隘峽或為□土所壅塞。水為逆流漸且没林麓。

「上騰狀如倒大瀑」、つまり「水が吹き出てくる様子はまるで大きな滝が逆さまとなったようだ」という表現は、土砂ダムの定義である「山崩れや土石流などによって土砂が流れ込み、河川を堰（せ）き止めた状態」について切迫感をもって伝えている<sup>8</sup>。なお、碑文には、この後下流の水が一時的に減り、人々は安心するが、一気に増水して「二丈八尺」（約8.5メートル）にも及び、残っていた人々も流されて亡くなるという過酷な状況が示されている。

碑の末尾には、以下のように記されている。

(2) 古来災害之慘毒。亦有如斯者否。雖未可知。抑は無警戒我者之所致。今吾幸已免其難。而又不告之後人其負罪子孫也不為輕矣。

【現代語訳】 我々の無警戒がこのような災害の惨毒を引き起こした。これを後の人に告げなければ、子孫が背負う罪は軽くないという。

伝えられた子孫である私たちは、過去の災害に向き合って警戒心を抱いているだろうか。改めて認識を持つ必要があるといえよう。

## 5. 撰文 小幡儼太郎と 書 成瀬温

小幡儼太郎〈おばた げんたろう〉について、『和歌山県政史』（1967）および『和歌山県史』（1989）に依拠しつつ記述すると<sup>9</sup>、1848年に生まれ、安井息軒〈そっけん〉らに師事し、和歌山県議会議員・田辺町会議員・衆議院議員などを歴任し、1909年死去。家塾を開いて儒学を教えたという。碑文には「小幡儼」とあるが、ここでは『和歌山県政史』『和歌山県史』に従って儼太郎とする。安井は昌平坂学問所教授を務める儒学者であり、安井の教えを受けた小幡も素養の高い人物であったことが推測される。他にも白浜町薬師堂境内にある、「川口伊吉翁生碑」が、小幡の撰書である<sup>10</sup>。

なお、書は成瀬温〈ゆたか〉によるもので<sup>11</sup>、成瀬が記した経緯は不明であるが、小幡と成瀬は安井を介して交流があったと考えられるため、小幡から依頼された可能性が高い。成瀬は明治大水害の前年に発生した磐梯山の噴火に際して建てられた「招魂之碑」も書している（撰文は南摩綱紀）<sup>12</sup>。

## 6. 「富田川災害記」建碑および碑文の意義

明治大水害は、四国中部を北上した台風に影響を受けた暴風雨による被害である。この水害について、台風の進路や極端に遅い速度、集中豪雨の被害状況などにおいて、2011年に発生した紀伊半島大水害との類似性を桑原（2013）が指摘している<sup>13</sup>。紀伊半島大水害の後に実施された調査では、「台風一二号災害では「明治二十二年の大水害や伊勢湾台風と比べて今度は……」とほとんどの住民が話し、そのときの水位を親から子へと語り継いでいた」とされている<sup>14</sup>。しかし一方で自治体の合併などにともなう地名の変化や、「地域社会の絆」の希薄化などにより、災害の歴史とそこから得られる学びが継続されがたい現状も見いだされている<sup>15</sup>。「富田川災害記」碑には、当時の状況と被災した地域の人びとによるメッセージが深く刻み込まれているにもかかわらず、摩耗し、難解な碑文を顧みる機会は極めて少ない。改めてここに提示することで、意義を伝えたい。

## 7. 「富田川災害記」翻刻と読み下し文

凡例： 翻刻の漢字は、可能な限り原本に忠実な文字を使用した。原資料に句読点はないが、読解の便を考慮して適宜句読点を施した。また、読み下しを併記した。翻刻の注は本文注と別に末尾に付し、参考文献を示した。

### 【資料翻刻】

富田川災害記 小幡儼撰 成瀬温書

甚矣水之関生民也苟已得其常。則其為利也。不可一二数。及其氾濫恣暴。亦粗害豈可量也哉。明治二十二年由客冬霖雨<sup>1</sup>数数。人皆曰春潦即秋旱。蓋豐年之兆矣。時至八月猶如五六月淫雨荐臻。從十七日東風寢加勢益劇。至十九日卯牌水遂平隄而不察下流淤填<sup>2</sup>河隄依旧。父老多且曰昔歲戊申之水。吾富田川尚浸我居不過若干尺而已。況乎此哉頃之風變西北雨轉急及申牌水方漲漫漭奔流于海。於是河隄民屋已当其衝者莫不破碎漂淪<sup>3</sup>。人口亦溺焉。山居之人欲往救之。水勢殊駛且無舟以備之者。雖親戚朋友。衽席<sup>4</sup>之下坐視其死而慟哭而已。及薄暮沿河山嶽往往壞崩及自其中噴水上騰狀如倒大瀑。而其隘峽或為□土所壅塞<sup>5</sup>。水為逆流漸且没林麓。而下流水反減。故下流之人心乃安。從為一切之計各登屋上唯俟其時焉耳。有頃水復至。時四望正黑。雷霆頻。或劇雨太甚如瓶水。或飛火如織往來空霄且四更乃一時決潰焉。雷奮電激震動天地。咆哮<sup>6</sup>怒突就下。而流水為之愈深。立增二丈八尺。於是乎其前所殘者大抵皆流亡之人畜竹木與沙石自水源以迄于海。兩山之間敷衍<sup>7</sup>交錯為所滌蕩<sup>8</sup>無復余者。然事咸在深夜人所未明□。故乃不能曲尽之矣。或曰但茫茫激流之中忽有燈火過隙。而叫声遙相聞者。蓋是或登屋上者之流矣。及至翌日辰牌水始大落。雷雨亦全歇而猶有殘屋上叫者。人人見之或泣或喜。蒼黃<sup>9</sup>奔走僦舟旁村各自致力尽得以救之矣。其所獲免者若干人。爇火以燠之且飲食之而後始可言已。又其已長流而自獲歸者若干人。時就聞其說亦皆可謂奇遇

矣。凡是難也併前後計之。圧死者二十三人。溺死者五百四十二人。被傷者五十二人。其屋宇全亡者七百四十九戸。半亡者四十七戸。全壊者四百五十九戸。半壊者一百四十八戸。牛馬亡者一百三十六頭。且河隄已尽壊水以横流。自非興大役則不可復治。而田野全変壊塙<sup>10</sup>。不毛之地其嘗称郷豪者。一朝暴為繩枢甕牖<sup>11</sup>之人。或最甚者至有挙家俱亡者焉人生之変凶可勝哀嘆哉。朝来村今井弥一郎<sup>12</sup>曰。古来災害之慘毒。亦有如斯者否。雖未可知。抑は無警戒我者之所致。今吾幸已免其難。而又不告之後人其負罪子孫也不為輕矣。故謀諸同志者。醵集若干金。欲具勒其事於石建之于本村円鏡寺遭難亡靈祠之傍以戒子孫。因求余記之。余深感其仁愛慮子孫之義遂記云。爾時其年十一月也。榎木源助鐫<sup>13</sup>。

### 【読み下し】

富田川災害記 小幡儼撰書 成瀬温書

甚だしいかな水の生民の関するや、苟くも已にその常を得れば則ちその利たるや一二もて数ふ可からず。その氾濫して暴を恣にするに及びては、亦その害あに量るべけんや。明治二十二年客冬より霖雨しばしばす。人皆曰く、春潦すれば則ち秋旱す、蓋し豊年の兆なりと。時八月に至りなお五六月の如く淫雨しきりにいたり、十日より東風ようやく加わり、勢い益々はげしく、十九日卯のときに至りて水遂に堤を平かにしてあきらかならず、下は河の堤を淤填して旧に依る。父老多く言ひて曰く、昔歳戊申の水も吾が富田川は尚我が居を浸すと若干尺に過ぎざるのみ。況んやこれをやと。しばらくして風西北に変じ雨転た急、申の時に及んで水まさに漲して海に流る。是に於て河堤民屋已にその衝に当る者破碎漂淪せざるは莫し。人口も亦溺る。山居の人行き之を救はんと欲すれども水勢殊にはやく且つ舟の以て之に備ふる者無く、親戚朋友と雖も、枉席の下其の死を坐視して慟哭するのみ。薄暮に及び沿河の山嶽往々壊崩し、其の中より噴水上騰する状大瀑を逆しまにするが如きに及ぶ。而して其のせまき峽は或は伏土の壅塞する所となり、水は為に逆流し、林のふもとを没せんとす。而して下流は水反って減ず。故に下流の人心は乃ち安んじ、従って一切の計をなして各々屋上に登り、唯その時をまつのみ。

しばらく有りて水復た至る。時に四望正に黒く、雷霆頻りに震ひ、或は劇雨甚だしきこと瓶水を傾けるが如く、或は飛火織るが如く空霄に往来し、夜まさに四更ならんとして乃ち一時に決潰す。雷奮激しく天地を震動し、咆哮怒突下に就く。而して流水これが為に愈々深く、立どころに増すこと二丈八尺。是に於てか其の前に残る所の者は大抵皆之を流亡し、人畜竹木と沙石と、水源より以て海にいたるまで、両山の間に敷衍交錯し、滌蕩する所となり復た余す者無し。然るに事みな深夜に在り、人未だ明らかにみざる所、故に乃ちことごとく之を尽くす能はず。或は曰く、但茫々たる激流の中、忽ち灯火有りて隙を過ぐ。而して叫声遙かに相聞えしは、蓋し是或は屋上に登

れる者の流れたるならんと。翌日辰のときに至るに及んで水始めて大いに落ち、雷雨亦全くやむ。而るに猶屋上に残って叫ぶ者有り、人々之を見て或は泣き或は喜び、蒼皇として奔走し、舟を旁らの村にやとひ、各自力を致して以て之を救うことを得たり。其の免をうる所の者若干人、火を熱て以て之をあたゝめ且つ之に飲食せしめて後、始めて言ふ可きのみ。又其の已に長く流されて自ら帰るをえたる者若干人。時に就きて其の説を聞くも、亦皆奇遇と謂ふ可し。凡そこの難たるや前後を併せて之を計るに、圧死者二十三人、溺死者五百四十二人、傷を被むる者五十二人、其の屋宇全く亡ふ者七百四十九戸、半ば亡ふ者四十七戸、全壊の者四百五十九戸、半壊の者一百四十八戸、牛馬の亡ふ者一百三十六頭。且つ河堤已に壊れ、水横流するを以て、大役を興すに非ざるよりは則ち復た治む可からず。而して田野全く壊塙不毛の地と変じ、其のかつて郷豪と称せられし者も一朝にして繩枢甕牖の人となり、或は最も甚だしき者は家を挙げて俱に亡ぶ者有るに至る。人生の変凶哀嘆に勝ふ可けんや。

朝来村今井弥一郎曰く、古来災害の惨毒、亦かくの如きもの有りや否や、未だ知る可からずと雖も、抑是我を警戒するもの無きの致す所なり。今吾幸にして已に其の難を免かる、而るに又之を後の人に告げざれば、其の罪子孫に負ふこと軽しと為さずと。故に諸同志の者に謀り、若干金を醸集し、具に其の事を石に勒し、之を本村円鏡寺の遭難亡霊の祠の傍らに建て、以て子孫を戒めんと欲し、因って余に之を記さんことを求む。余深く其の仁愛子孫を慮るの義に感じ、遂に記して云う。時に其の年十一月なり。榎木源助が鐫つ。

## 本文注

- <sup>1</sup> 北原糸子編『日本災害史』（吉川弘文館、2006）、P5。
- <sup>2</sup> 和歌山県編『和歌山県災害史』（和歌山県、1964）、P1。
- <sup>3</sup> 同上書、P2。
- <sup>4</sup> なお、「『災害の記憶』事業」は2015年度から2021年度まで継続して実施されており、それぞれ成果が作成されている。
- <sup>5</sup> 『日本歴史地名大系』新十津川村より。
- <sup>6</sup> 報告は以下の動画で視聴可能である。（上富田 報告1「円鏡寺に残された富田川災害記 一土砂ダムの恐怖を伝える一」橋本唯子（和歌山大学）  
[https://www.youtube.com/watch?v=hVHwCG2\\_owo&list=PLCqUtN14-R4FFJ\\_asQN9bI-LhuR7O1sF&index=3](https://www.youtube.com/watch?v=hVHwCG2_owo&list=PLCqUtN14-R4FFJ_asQN9bI-LhuR7O1sF&index=3)（参照日 2023-01-05））
- <sup>7</sup> 「土砂ダム」表記については、同様の現象を示すものとして「天然ダム」「河道閉塞」「堰止め湖」などがあるが、『『災害の記憶』事業では近年一般的に用いられる「土砂ダム」表記に統一したため、ここでもそれに準拠する。
- <sup>8</sup> 『デジタル大辞泉』「土砂ダム」より。
- <sup>9</sup> 和歌山県政史編さん委員会編『和歌山県政史』 第1巻序編 明治編（和歌山県、



1967) および和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史』人物(和歌山県、1989)。

<sup>10</sup> 白浜郷土研究会編『白浜町の碑文(郷土研究 第1集)』(白浜町中央公民館、1964)。ここには「田辺附近にこの人の作になつた碑文が多い」と記述されている。

<sup>11</sup> 成瀬は、「晋代調楷書を得意とし、文部省検定の習字帖など公用の編纂事業に従事するなど、明治書界において代表的立場にあった」とされる(ロバート・キャンベル「在野十年代の視程一儒者・石川鴻斎年譜稿抄一」、国文学研究資料館編『明治開化期と文学 幕末・明治期の国文学』(臨川書店、1998)所収)、P199~200。号は大域。

<sup>12</sup> 菊池万雄『日本の歴史災害 明治編』(古今書院、1986)、P71。

<sup>13</sup> 桑原康宏「水害と地名 紀伊半島を襲った明治と平成の大水害」(谷川健一編『地名は警告する』(富山房インターナショナル、2013)所収)より。

<sup>14</sup> 向井弘晏「熊野川流域の災害と地名」(同上書所収)、P182。

<sup>15</sup> 田中弘倫「那智川の土石流災害と地名」(同上書所収)、P196~197。

### 翻刻に関する注

<sup>1</sup> リンウ。長雨のこと。

<sup>2</sup> オテン。堆積した状態のこと。

<sup>3</sup> ヒョウリン。おちぶれてさすらうこと。

<sup>4</sup> ジンセキ。寝室のこと。

<sup>5</sup> ヨウソク。塞がった状態のこと。

<sup>6</sup> ホウコウ。大きな声を出すこと。

<sup>7</sup> フエン。おし広げること。

<sup>8</sup> デキトウまたはテキトウ。洗い流すこと。

<sup>9</sup> ソウコウ。あわてふためくさま。原文は「蒼黄」と記されているが、「倉皇」と同義語。

<sup>10</sup> コウカク。土地がやせた状態のこと。

<sup>11</sup> オウユウジョウスウ。貧しい家のこと。

<sup>12</sup> 明治初期朝来村戸長であったとされるが、詳細不明。

<sup>13</sup> ウガツもしくはホル。掘るという意味。

### 主要参考文献

上富田町史編さん委員会編『上富田町史』 (上富田町、1989.4-1998.3)

『上富田文化財』27

橋本唯子「「富田川災害記」 明治の資料からわかる土砂ダムの恐怖」(『産経新聞』掲載「先人からのメッセージ 防災減災わかやま」所収)

菊池万雄『日本の歴史災害 明治編』(古今書院、1986)

楠見節編『碑文全集』(和歌山縣西牟婁郡役所、1912)

桑原安弘「明治二十二年大水害の気象上の特質と災害の規模」(『くちくまの』50所収)

野口民雄「田辺市及びその周辺の碑文(5)」(『田辺文化財』7所収)

富賀鹿蔵『観心寺史要』（大日本楠公会、1931）

和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近現代一』（和歌山県、1989）

和歌山県政史編さん委員会編『和歌山県政史 第1巻 序編 明治編』（和歌山県、1967）

和歌山県『和歌山県災害史』（和歌山県、1963）

和歌山県立博物館編『先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝える：命と文化遺産とを守るために 7（田辺市・上富田町）』（和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会、2022）

和歌山県立博物館編『歴史から学ぶ防災：命と文化遺産とを守る：現地学習会：発表資料集』（和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会、2022）

## 謝辞

翻刻にあたっては、円鏡寺および上富田町教育委員会のご高配をいただきましたことを御礼申し上げます。